

十年前の調布市一家殺人事件。憶えている人も多いだろう。当時、かなり世間を賑わせた凶悪な事件だ。あれから十年、私は独自のルートで再調査を行った。結果、警察も見つけることができなかつた真犯人を見つけることに成功した。調布市一家殺人事件の被害者田島道久さん、歩美さん、葵ちゃん、美里ちゃんご冥福をお祈りします。そして調査、取材を手伝ってくださった事件関係者の皆様、本当にありがとうございます。私は彼らを代表して真犯人をここに告発する。

この事件を知らない人、また忘れている人もいると思うので事件の概要を説明したい。

調布市一家殺人事件

2006年、12月30日、午後11時過ぎに事件は起きたとされている。被害者は田島道久、歩美夫妻、長女当時5歳の葵ちゃん、次女当時3歳の美里ちゃんであった。調布市内にある一戸建てに家族4人で暮らしていた。田島道久は大手保険会社に勤める会社員で、話し上手で愛想がよいために同僚や客からは好かれていたという。妻である歩美も近所付き合いは良好で、子どもを保育園に預けた後は地域ボランティアに参加するなど積極的な活動を行っていた。警察が聞き込みをしていると皆が口をそろえて言ったのが「まさかあんなにいい人が殺されるとは」であったという。

この事件の注目すべき点は大きく分けて2つある。1つは犯行の残虐性。もう1つは犯人の異常行動である。まずは警察が捜査した結果に基づく犯行の流れを説明したい。

犯人は午後11時すぎに家の横のフェンスを登り、一階のお風呂場の小さな窓から家の中に侵入した。そして二階の部屋で寝ていた葵ちゃんの首を絞め殺害。一回で寝ていた道久さんが二階の異様な音に気付き目覚め二階に上がってこようとすると階段で犯人と遭遇。刃渡り15センチのナイフを心臓あたりに刺され、ほぼ即死であった。その後、犯人は屋根裏部屋で寝ている歩美さん、美里

ちゃんの元へと向かった。美里ちゃんをナイフで滅多刺しにし、逃げようとした歩美さんを背後から掴み首にナイフを突き立てた。ナイフは首に刺さったまま発見されたという。

その後、犯人は葵の部屋に戻り、何やら歩き回った後、一階のリビングに行き田島家のホームビデオを一時間ほど見ている。金品には一切手をつけていなかったが、キッチンをかなり物色した形跡があった。こうした時間を含めると犯人は犯行後2時間から3時間ほど田島さんの家に滞在していたことになる。そして犯人は侵入方法と同じくお風呂場の窓から出て逃げていった。

これが事件の流れである。事件の発覚は翌日の12月31日午前8時。正月を祝うために家に来た道久さんの弟が発見した。一家惨殺、首にナイフを突き立てる残忍性、犯行後の異常行動、これらにより当時、かなり世間を賑わせていた。しかし、犯人のこの異常すぎる行動により事件は早期解決するのではないかと見られていた。しかし、現実とは違っていた。

警察は初動捜査において致命的なミスをした。事件発覚直後、警察が被害者宅に着くとすぐに捜査を始めたのだが多くの捜査員が一斉に入ってしまったために犯人の軌跡を消してしまったのだ。これにより、犯人の家の中の行動を予測することが困難となったほか、犯人特定にも時間を要するようになってしまった。しかし、警察はこの事件は早期解決できるものだと思っていたのである。しかし、警察は早期解決できるものだと踏んでいたのではなくに目撃証言も取らずに被害者の周囲の人間を調べ始めた。こんなにも残忍な殺害をするのはおそらくかなり強い恨みがあったに違いない、警察はそう踏んでいたのだ。しかし、被害者の人間関係を洗い出しても強い恨みを持っている人はいなかった。それからして、警察は目撃証言を取り始めたのだ。しかし、夜11時という時間だけあって有力な目撃証言を得ることはできなかった。それから捜査を続け、述べ200人以上の捜査員を導入して聞き込み調査を行って結果有力だと思われた情報は3つだけであった。

① 事件の一週間ほど前に田島さん宅を見つめる人影を見た。

② 保育園の夏祭りのビデオが持ち去られている

③ 事件当日、田島さん宅近くで「森の中のくまさん」を小声で歌いながら歩いている人とすれ違った。何かよるよろしっており様子がおかしかった。

これらの証言をもとに犯人像をプロフィールした結果、犯人の性別は男性、慎重170センチ程度、精神疾患の可能性、被害者と顔見知りの可能性、などが

挙げられたが事件解決の決め手とはならなかった。警察はその後、有力な目撃証言をした人にお金を払うとしたが、寄せられる情報はどれもデタラメや大したことない情報しかなかった。

犯人の異常性、警察の操作ミス、犯行時間による目撃者の少なさなどが相まってこの大きな事件は未だに解決されていないのである。

そしてちょうど10年が経過した、今年2016年12月30日。私の元に一通の手紙が届いた。それは道久さんのお父さん、田島英彦さんからであった。手紙には息子、孫娘を二人同時になくした痛みそして犯人が捕まらない悔しさが溢れていた。警察に頼んでも、今も全力で捜査していますから、の一点張りでの新しい報告もない。そこで、フリージャーナリストである私に独自で捜査をして欲しいという願いが書かれていた。私はその願いを引き受けることにした。しかし、99%解決できないと思っていて欲しい、と伝えた。私も馬鹿ではない。警察が解決できなかった事件を10年後に記者一人で解決することがいかに非現実的なことかくらいは理解しているつもりだ。それでも英彦さんは私に依頼してきた。なぜ私なのか、と問うと英彦さんは「あなたが書く記事はいつも第三者の目線で書かれているように見えて被害者遺族が一番に考えている。私はあなたの記事を読んだ時にそう思い、同時にあなたに任せてみようと思ったんですよ」と言われた。私は特にそんな意識もしないで書いていたので、それを言われたときは驚いた。だが私が書いた文章が被害者遺族を少しでも救うことができているのだと知ることができ嬉しかった。

私は事件の調査を始める上です、現地に行ってみることにした。田島さん宅は現在も事件当時のまま残されている。甲州街道沿いにある細い道を入っていると家が連なる住宅街に出た。住宅街に入ると車通りも少なく、歩行者も見受けられない。少し歩くと周囲とは明らかに雰囲気異なる家が現れた。そこが田島さんの家であった。私がおもむろに田島さんの家の中に入っていきこうとすると突然背後から肩を掴まれた。

「うおっ」

と言って反射的に肩に置かれた手を振りほどき後ろを見るとそこには警官がいた。

「ここは立ち入り禁止です。勝手に入らないでください」

「あ、すいません。許可は取っております」

そう言って書類を警官に渡した。私が記者としてまだ駆け出しの時から仲良くさせてもらっている本庁の刑事に調査許可書をもたらっておいたのだ。

「本庁の許可書、今確認とりますので少々お待ちください」

そう言って警官は無線を取り何やら話し始めた。

「お待ちいたしました。確認が取れましたので入って大丈夫ですよ。あと一応私も同伴します」

「え、同伴するんですか？」

「まあ、何もしないとは思いますが万が一のための監視役として」

「何にもしないですよ」

私は犯人扱いされたみたいで少し機嫌を悪くした。

「あ、あと手袋してくださいね」

「わかってますよ」

何年この仕事をしているかと思っっているんだ。私は手袋をはめ玄関を開けた。入ると廊下がありすぐ左に階段がある。私は階段には登らずそのまま廊下を進み、リビングへと向かった。リビングは未だに誰か生活しているのではないかと思わせるくらい生活感があつた。だがよく見ると、全て埃をうっすらと被っていた。10年前、ここで犯人は4人を殺害後ホームビデオを一時間も見ている。何を目的としたのだろうか。また見たビデオとは異なるビデオテープを持ち去ったのだなせだろうか。

「すいません、犯人が見たとされるビデオテープは今どこに？」

「おそらく鑑識にあります」

「そうですね、ありがとうございます」

あとで見よう。次にキッチンが目に入った。キッチンは事件当時ひどく荒らされていたようだが、今は綺麗に片付けられている。現場写真を見ると、お箸やスプーン、フォークの棚が特に荒らされていた。なぜ、キッチンを荒らした？何か探してたのか？しかし、ここから無くなったものは一切なかったという。なぜかお箸、スプーン、フォークが全て洗われていたことも後の捜査で明らかになっている。次に私は二階へと向かうために階段を登った。階段の踊り場のフローリングに大きな赤褐色のシミがある。おそらく、道久さんの血の跡だろう。道久さんは犯人と踊り場で遭遇、体の向きを察するに取り押さえよう

としたところを返り討ちにあったとされている。私は二階へ行き、葵ちゃんの部屋へと行った。葵ちゃんの部屋は事件当時も荒らされておらず何も手がつけられていなかった。葵ちゃんの遺体も家族の中で一番損傷が少なかった。しかし、犯人は犯行後この部屋を歩き回った形跡があるのだ。犯人が何の目的を持ち、そのような行為をしたかは未だに不明である。私は葵ちゃんの部屋を後にして屋根裏部屋へと移動した。そこかしこに血が飛び散った形跡があるが大きな血の跡は無かった。血しぶきがある場所とは少し離れた場所に少量の血の跡が残っている。おそらくこれが歩美さんの血痕だろう。首を刺されているが、その後ナイフは引き抜かれなかったので出血が少なかったと考えられる。歩美さん、どんなに怖かったことだろう。目が覚めると隣で娘が知らない男に滅多刺しにされ、逃げようとする追いつかれ首を一刺しされる。そのような残酷な犯人が今でも私たちと同じように普通に生活している事実には私は怒りが湧いてきた。絶対にこの事件を解決しなければいけない、そう決意した。

私は田島さん宅を後にすると再び警視庁を訪れた。そこにはしかめっ面でパソコン画面を睨む酒井大輔刑事の姿があった。

「酒井さん！」

「おー、渡辺、現場には行ってきたのか？」

「はい、おかげさまで現場を調べることができました。ありがとうございます。

あれ？酒井さんデスクワークですか？」

「あ、ああ、ちよっと先日犯人取り逃がしちまってな」

「え、それって幼女誘拐事件の犯人ですか？テレビでかなり話題になりましたよね。あと少しいうところで犯人が警察の存在に気づいてしまったという。

それ、酒井さんだったんですか！？」

「いや、俺というよりは、俺の班だな。誘拐された子どもの家に警官が出入りするところを見られていたようだ」

「結局、子どもは・・・」

「山の中で遺体となって発見されたよ。まだ5歳だ。性的暴力を受けていたよ」

「そうなんですか・・・でもそれは酒井さんの責任ではないんじゃない・・・」

「いや、俺の責任だ。もっと部下にしっかり指示していれば。俺はずっと後悔しているよ」

「だから現場から離れているんですか？」

「そうだな、今は会計処理をやらされているよ」

そう言って酒井さんはパソコン画面に目をやった。

「いやー、それにしてもパソコンで難しいのな、全然わからないわ」

酒井さんはその場を和ませるように言った。しかし、私はそんな酒井さんを見ていられなかった。

「酒井さん、私に捜査協力して頂けないでしょうか？」

「いや、今でもかなりしていると思うんだが、これ以上何を？」

「私と一緒に捜査を共にしてください」

「いや、それは無理だろう。勝手に捜査することは禁じられている」

「いいんですか？重犯罪を犯した犯人が今でも普通に生活しているんですよ？被害者はそれを苦しんでいる。酒井さんだって知っているはずですよ。」

「ふう、上に逆らうことになるな」

「パソコンの作業、手伝いますよ」

「当たり前だ」

酒井さんは笑いながら、ジャケットを羽織った。刑事の顔だ。

「それじゃあ、行こうか。捜査」

「はい！」

酒井さんは上司に見つからないようにこっそりと警視庁を出た。

「とりあえず今どこまで進んでいるんだ？」

「今は事件の概要を調べて、現場を調べただけです」

「じゃあ、聞き込み調査とかしてないんだな？」

「はい、まだしていませんね。あ、あと犯人が現場で見ていたビデオテープを見たいんですけど」

「あー、ビデオテープか」

「鑑識が持っているらしいんですけど」

「いや、多分もう鑑識じゃなくて捜査資料と一緒にまとめて置いてあると思う。よし、俺に任せろ」

そう言って酒井さんは誰かに電話し始めた。10分ほど経つと若手の刑事が周りを警戒しながら小走りで向かってきた。

「おう、お疲れ、サンキューな」

「ちよつと酒井さん、まづいですよ。デスクワークはどうしたんですか？」

「まあまあ、いいじゃねーの」

「気付かれる前に返しておいてくださいね」

「はいよ〜」

そう言って若手刑事は帰って行った。

「あいつはな、俺が捕まえた犯人をあいつの手柄にしてやったから俺に大きな借りがあるんだ」

誇らしげに私を見てきた。

「じゃあ、これ見てみるか」

私たちは酒井刑事の家に向かった。ビデオデッキを物置から引っ張り出し、早速見てみることにした。

保育園の運動会の録画であった。

「葵〜がんばれ〜！」

歩美さんが応援している。葵ちゃんはカメラに向かって笑顔で手を振っている。

「よーい、どん！」

音ともに葵ちゃんが走り始める。ゴール手前でギリギリ抜いて1位でゴール。

笑顔で葵ちゃんがこちらに寄ってくる。

「やったー！ー！！」

「すごいじゃない。葵！」

「葵頑張ったな〜」

そこには幸せそうな家族の姿があった。美里ちゃんも楽しそうだ。それからも一緒にお昼ご飯を食べる歩美さん、葵ちゃん、美里ちゃんの姿が映されていた。

犯人が見たであろう一時間、それで保育園の運動会午前の部が終了した。

私たちは何も話すことができなかった。とても重い空気が流れている。

「犯人はこれを一時間見たんだよな、この四人を殺害して後に、その現場で」

「はい、そうです」

「考えられないな」

「はい」

確かに、なぜこのビデオを見る必要があった？目的はなんだ？このビデオテープには何の意味があるんだ。そしてビデオテープの列から一つだけなくなっている保育園の夏祭りのビデオ。そこには何が映されていたんだ。

「とりあえず、現段階でこのビデオに不自然な点はないな」

「はい、そうですね」

「じゃあ、行くか」

「え、どこにですか？」

「そりゃあ、決まってるんだろ。聞き込み調査だよ」

「捜査資料は？」

「パソコンで見れるのよ、この時代は」

「酒井さん大丈夫ですか」

「さすがにそれくらいはできるわ！」

そう言って酒井さんはパソコンを起動した。このパソコンは警視庁から提供されているもので捜査資料を閲覧できるのだという。

「あつた、調布市一家殺人事件のファイル」

「まず誰に聞き込み調査しますか？」

「事件発見者の道久さんの弟田島幸雄さんに会いに行こう」

田島幸雄さんは三鷹市に一人で住んでいた。事件当時年齢は34歳で事件の発見後自らの携帯電話から通報してきた。警察の取り調べに対して、幸雄さんはこう答えている。

「発見時の状況を説明してください。辛い記憶だと思いますがよろしくお願ひします」

「はい。家に着いた時から少し様子はおかしいと感じました。部屋の明かりはついていないし、葵や美里のいつもの元気な声が聞こえなかったのです。それでもまだ寝ているのかと思い、兄から渡されていた鍵で家に入りました。すると、何かが腐った臭いがしてとても気持ち悪くなりました。私は鼻をハンカチで押さえて家に入って行きました。いつも兄さんが寝ているリビングのソファに行きました。兄さんはいませんでした。そこで私は二階へ行こうと考えました。すると、そこで倒れている兄さんを発見しました。胸から血を流しており、体に触るともう冷たくなっていました。私は激しい吐き気に襲われトイレに向いました。そしてとりあえず警察に電話しなければいけないと感じ、電話しました。警察に何を言ったかは覚えていません。もう頭が真っ白だったので」

「それでは遺体を発見したのは道久さんだけなんですね？」

「はい、私はそれで呆然となってしまっ」

「なるほど、ありがとうございます」

幸雄さんはみんなの遺体を見つけた訳ではなかったのか。それでも兄の遺体を

見つけた時の精神的ダメージは計り知れないだろうな。

「おい、着いたぞ」

酒井さんに声をかけられ私は調書をカバンにしまった。幸雄さんの家は一戸建ての家だ。幸雄さんは独身で、一人で暮している。それにしても大きい家だな。インターホンを押してみる。何回か呼び出し音がした後に、幸雄さんが出てきた。

「は、いい、どなたでしょうか？」

「あ、警視庁の酒井です。少しお話しよろしいでしょうか？」

「は、はい」

そう言って少しすると玄関が開いた。

「あの、刑事さんですか？何かあの事件のことで進展でも？」

「いや、そういうわけではないんですが、再捜査をする上でもう一回幸雄さんの話を聞いておきたいです」

「は、はあ。あれ、お隣の方も刑事さんですか？」

「あ、いえ、私はフリーのジャーナリストで名前を渡辺祐介といいます。あなたのお父さんである英彦さんから事件の再調査を依頼されたので再調査します」

「父さんから？」

「はい、先日手紙が届きました」

「そうなんですか、とりあえず家に入ってください」

「お邪魔します」

家の中はとて広く、床は大理石のようなものでできていた。私たちはリビングに通された。

「今お茶入れますね」

「あ、ありがとうございます」

私はリビングを見渡した。本当に広い家だな。ん？テレビラックの上に写真盾が何枚か置いてある。これは・・・田島家族と幸雄さんの集合写真だ。登山の写真や動物園に行った写真などいろんなところに行っているようだった。

「結構仲良くさせてもらってたんですよ、道久の家族と。葵ちゃんも美里ちゃんもこんなおじちゃんに懐いてくれてね、本当に天使でしたよ。歩美さんだつて」

幸雄さんがお茶をテーブルに置きながら私に話しかけてきた。

「そうですね、結構色々なところに行っていたんですね」

「はい、どこか行く度に私に声をかけてくれました。調布市と三鷹市もとても近いのでいつでも家に行くこともできましたし」

「そうなんですか」

「あゝ」

酒井さんが会話に入ってきた。

「さっき、話途中で終わってましたよね？」

「え？」

「歩美さんだって、で終わってませんでした？」

「あ、あああ、歩美さんも優しくくて本当に良い人なのに、と言おうとただけです」

「ふうん」

「それより、渡辺さん。父から手紙を受け取ったんですって？一体どんな内容だったんですか？」

「内容というか、以来だけでした。事件から10年が経過してしっかりと再調査をして欲しいと書かれていました」

「なるほど」

「英彦さんにはいつから会っていないんですか？」

「もう1年は会ってないですね」

「そうですか」